

Ｊ 大学生の日本代表に存在する外国出身選手に対する認識

スポーツマネジメントゼミナール 1316047 袴田 晃広

1. 研究動機・研究目的

2019年にラグビーワールドカップが日本で開催された。日本代表はグループステージで、対戦当時世界ランク2位のアイルランドに歴史的勝利を飾った。日本の勢いは止まらずグループステージを全勝し、史上初めてとなる決勝トーナメントの進出を果たした。決勝トーナメントで日本代表は3-26で南アフリカ代表に敗戦したが、力を出し切り、ベスト8の歴代最高順位という結果で幕を閉じた。

近年、ラグビーだけではなく外国出身選手が日本代表に選ばれることが多くなった。株式会社エアトリ(2019)は、「日本国籍取得に関するアンケート調査」というアンケート調査を行った。「日本国内で活躍する有名人が日本国籍を取得することに対してどう思いますか?」(調査1)より、半数以上は日本国籍の取得に対して好印象ではなかった。以上のことより日本スポーツは、外国人選手に関する競技規則を守っているにも関わらず、支持されていない現状がある。

本研究の目的は、年々日本のチーム内に増加する外国出身選手に関して、大学生がどのように認識をしているのかを明らかにすることである。さらに、本研究の成果を活用し、スポーツに関わることで、外国人への排他意識の低下に繋がるかどうかを検証することである。

2. 研究方法

本研究は、2019年11月4日にJ大学の127名を対象にGoogle formアンケート調査を行った。調査項目は、自国に対する愛着や優越性、優位性に関する意識を把握するために愛国心ナショナリズム尺度(佐久間ら, 2011)9項目、外国人に対する偏見・排外意識を把握するために接触経験(萩原ら, 2010)17項目、日常でどれだけメディアとの接触があるかを把握するためにメディア接触(望月ら, 2013)17項目、ラグビーワールドカップ前後においての外国人と日本人に対するイメージを把握するために形容詞調査(萩原ら, 2010)28項目を使用した。分析は萩原ら(2010)の分析方法を基にIBM SPSS Statistics Version 21を用いて、対応のないt検定や、MANOVA、 χ^2 検定を行った。

3. 主な結果と考察

仮説1では、留学経験やラグビー観戦経験をすると、外国人と接触する機会が増えるため、有意な差が認められるとした。結果として、留学経験のある人(M=11.20)は、留学経験のない人(M=6.79)より、外国人に対する偏見・排他意識の項目が有意に高く、仮説通りとなった。しかし、ラグビーの観戦経験の有る人(M=7.03)は、ラグビー観戦経験の無い人(M=6.33)よりも高かったが有意な差は認められなかった。ラグビー観戦経験に有意な差が認められなかった理由として、試合会場に行き外国人観光客に囲まれている状態で観戦をするのと、友達と家で観戦するのでは、接触の濃さが大きく異なることから、観戦方法について質問項目に入れて分析することで、結果が異なる可能性もあると考えられる。

仮説2では、メディアの接触量が多いと偏見・排他意識が低下とした。先行研究では、メディアで報道されている情報に触れると、偏見・排他意識が低下すると示していた。結果は、先行研究通り、WEB やテレビだけではなく、若者には馴染みの薄い雑誌やラジオなどのマスメディアに関しても有意な差が認められた。有意な差が認められたのは、CM やテレビ番組、本の表紙など様々なメディアで、外国出身者などをよく目にしているため、偏見・排他意識が低下していると考えた。

仮説4は、ラグビーワールドカップの観戦を経て、日本人と外国人のイメージが変化するとした。結果として、外国人に対してラグビーワールドカップを経て、当てはまらないから当てはまるに変化したイメージは、「おしゃれ」、「活力がある」、「自由な」、「危険な」、「先進的な」、「強い」、「伝統的な」、「豊かな」、「歴史が古い」であった。外国人に対して「危険な」と感じる人が増えた理由として、ラグビーはコンタクトスポーツであるため、体の激しいぶつかり合いから外国人に対して「危険な」というイメージがついたと考えた。

4. 結論

本研究では、日本代表に存在する外国出身選手に関して、大学生がどのように認識をしているのかを明らかにし検証した。

1. 外国人に対する偏見・排他意識は、外国人とのあいさつのような直接的な接触の多さは関係が無いことが明らかとなった。

2. WEB やテレビの観戦など日頃慣れ親しんでいるマスメディアだけでなく、雑誌やラジオなど若者に馴染みがメディアであっても外国人に対する偏見・排他意識は変化することが明らかとなった。

3. 愛国心が高いと外国人に対してイメージが変化する。ナショナリズムは外国人イメージの変化に繋がらないことが明らかとなった。

4. ラグビーワールドカップのようなスポーツのビッグイベントは外国人だけでなく、日本人に対しても大会を通してイメージが変わることがわかった。

5. 競技種目によって、外国人への意識は変化しないことが明らかとなった。

5. 卒業論文の執筆を終えて

ラグビーワールドカップの前後で形容詞調査を行う予定であったが、止むを得ず1日でその場で前後について調査をした。ラグビーワールドカップ開始前と閉幕後にアンケート調査をすると、より正確な結果が出たのではないかと考えた。自分の時間管理を徹底していればと後悔をした。

本研究を進めるにあたり、ご指導を頂いた指導教員の小笠原悦子教授、三倉茜様に心から感謝いたします。またアンケートにご協力してくださった、川田裕次郎助教と受講生に感謝の気持ちと御礼を申し上げます。